

六月二十四日、この年の三月十日に生まれた善穂が死んだ。生まれて三か月の短い命であった。

六月二十六日、部隊はバクタンを出発し、マゴックに向かった。十二キロの道のりであるが私達は山の中腹に作られた細い小さな道を歩く。片側は谷になっており、無言で歩いた。

七月四日、私は近況報告のため、貨物廠本部を訪ねた。

ここまで戻ったのに双子の生き残りの良穂が、又死亡してしまった。子の二重の死にあつての悲劇は悔やまれて涙も乾いた感じである。

八月十五日、終戦、この日を境にあればほど熾烈をきわめた砲撃はびたりとやみ、それから約一か月後の九月下旬、家族を山に残したまま軍と共に下山し、キャンガンの米軍に投降武装解除をうけ、満一年後の昭和二十一年九月、引揚船で名古屋に上陸、帰郷した。

海南島の思い出

兵庫県 坂東貞市

海南島三亜・海軍特務部・私は（開拓訓練所・南方開拓農業研究で）、昭和十七年五月より昭和十八年五月まで、訓練を受け、第一次開拓民として三亜飛行場近くの開拓村六郷村に入植した。

当初は約二百人の予定地で、銃を持って夜間は入植者が交代で、村及び附近の警備治安に勤め、昼は新鮮な野菜、果物、稲作等の作づけを行い、日夜努力しました。

現地人の小作農家二家族が割りあてられ、入植当初、熱帯性の悪性マラリアや赤痢などが発生し、病気のために老人や幼い子供達が次々と死んでゆき、私もその病気にかかった一人でしたが、海軍病院に入院、奇跡的にも一命を取りとめました。

昭和十九年の六月頃から次第に戦雲があやしくなっ

て、ある夜、急に海南島に敵軍が上陸するおそれがあるとの連絡があり、直ちに奥地に逃げるよう通達があった。夜通しその準備をしたが、幸いにも上陸地点が変更になったとの急伝達があつて一安心しました。

その後、昭和二十年一月、現地召集を受けて、陸軍上等兵として戦いに参加することになり、陵水という地点に集結しました。現地では竹槍を持って海口に向かつて毎日の行軍でした。海口からは木造船で雷州半島に上陸、途中海上で激しい銃撃を受けたが危うく難を逃れました。竹槍隊は更に砂糖キビ畑の多い雷州半島を毎日毎日行軍を続けてやっと、麻昌に到達。そこでしばらく警備の任務についていたが、生産業務に関係ある者は現地召集地に帰れ、との命令を受けて、海南島に帰ることができました。途中わが家の耕作地があり、そこで、年老いた母が里イモの収穫をしています。

その後数日して、再度現地召集を受けて、海軍三並に入隊、警備任務につきました。終戦後、開拓村六郷村は海南島居留民の集結地になり、わが家でも六家族

の方々と集団生活を始めるありさまで、いつ帰国できるかわからない。不安を抱えながら、集結地の日本人会から若干の物資の配給を受け、おたがいに激励しながら自家菜園作りをしました。季節に恵まれ、乾燥期なので、朝夕の散水で良質の野菜が次々と収穫できました。約半年、集団での生活が過ぎて、昭和二十一年三月、帰国乗船命令が発令されました。集結地は熱帯地のこととて衛生状態も悪く、病気になる者も多く、不安が強まる日々でした。

海南島は三月といえども炎熱焼くが如き直射を全身に受け、徒歩で、背負袋一つで榆林港より引揚船に乗船し、昭和二十一年三月二十三日大竹港に上陸、船中で病死した者もいました。

引揚げ後、農業開拓地さがしは容易ではなく、同志数人は生活の見通しに不安を感じて離散する状態でした。昭和二十六年八月より、大塚鉄工所に就職、保安要員として勤務、昭和五十一年三月の定年後も数年、保安勤務、補欠要員としてつとめていたが、昭和五十五年脳内手術を受けて約二年間加養。その後は腰痛病

を起こし重い脱腸病を併発し（平成二年九月二十日手術完了）次々と体調をくずし現在も保養中。

南方居住の動機

埼玉県 小澤 頼 助

私の部隊は、大東亜戦争勃発後、南方への転進命令に接し、満州を後に、昭和十七年九月二十七日、途中佛印、シンガポールに寄港、スマトラ島パレンバンに進駐いたしました。

私達の部隊の中から九人が満期除隊することになり、その中から四人が、現地除隊をして、国家のために微力をつくしたいと言われたので、さすが飛行団司令部の人達であるとの誇りを感じさせられました。数日して、燃料廠、および南方航空会社、その他へ就職がきまり、月給が二百円と決まりました。ところが安いので、内地へ帰って就職したら三百円もらえる。しかも中島飛行機製作所へ行けば、班長になれるからと。

他の戦友達は話していた。私はその言葉を聞き、生来一本気質だけに、胸の中で、「なんと情ない奴らだ、金のことなど言うなんて、お前達は内地に帰れ」と。一週間前に、大洋丸一万吨級の船が、南方各方面で必要な人材（技術者）を満載して内地から南方に向う途中、台湾沖で連合国の魚雷で撃破されたとのことで、南方では私達を初め、技術者は一人でも多く欲しいところですよ。

私はパレンバン州政府に履歴書を提出して、総務課長木元さんの面接を受け、採用されました。

昭和十八年一月二十日、パレンバン州政府へ奉職いたしました私は、気持を切りかえ、戦争は兵隊さんで、現地行政は私達軍政要員のつとめであるとの誇りと信念をもって微力をつくし、青春時代の七年間を国策の遂行にあたらせていただいた。一筋に祖国日本の繁栄と国家の安泰と大東亜諸民族を旨めさせ、立派に栄えるためにつとめました。しかしながら祖国の武運、利あらず、敗戦という冷酷な事態となり、想像できないような憂き目を見ることになりました。私は、今日